

---

# 同伴分娩が父性および夫婦関係に及ぼす影響

山縣猛日 倉井孝子 小林栄子 福永寿則

---

周産期医学 第20巻第8号 別刷

(1990年8月)

---

東京医学社

〒113 東京都文京区本郷 3-35-4  
電話 03 (811) 4119 (代表)

---

研究

同伴分娩が父性および夫婦関係に及ぼす影響

山縣猛日\*1 倉井孝子\*2 小林栄子\*3 福永寿則\*4

はじめに

近年、産む側のニーズの増加により同伴（夫立会い）分娩は確実に増加しつつある。しかし、その効果についての検討は未だ不十分である。当院において同伴分娩を受け入れて以来ほぼ4年になるが、当初より受け入れの基準として父親学級の受講、もしくは医師との面談を義務づけている。同伴分娩には従来よりさまざまなメリットやデメリットが指摘されている。その中から本研究では、「夫の育児への参加」というメリットと、「夫婦関係、特に性生活に支障を来す」というデメリットに焦点をあて、アンケート調査により考察を試みたので報告する。

I. 対象および方法

昭和63年1月1日より同年12月31日までの1年間の同伴分娩群（以下同伴群）94例、およびコントロールとして同時期の無作為抽出による非同伴分娩群（以下非同伴群）100例に対し郵送による無記名アンケートを行った。

アンケートの回収率は同伴群64例68.1%、非同伴群61例61%であった。

II. 結果

1. 同伴分娩に関する検討

同伴群64例の同伴希望の内訳は、夫婦ともが9例（14.1%）、妻からが50例（78.1%）、夫からが4例（6.3%）、その他が1例（1.6%）であり、約

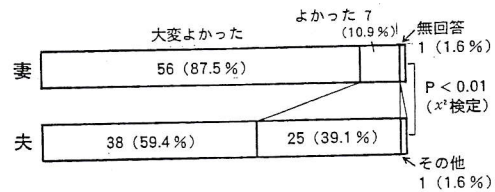


図1 同伴分娩を体験した感想

8割が妻からの強い希望によるものであった。

体験後の夫婦おのおのの感想を図1に示した。妻および夫ともそれぞれ1例ずつを除いて、「大変よかった」、「よかった」と回答しているが、「大変よかった」が妻87.5%に対して夫59.4%と妻と夫の感想に有意の差がみられた。

また、次回同伴の希望の有無については、「する」が48例（75%）、「しない」が1例（1.6%）、「わからない」が11例（17.2%）、無回答が1例であった。夫婦の意見が分かれたのは3例（4.7%）で、妻は3例とも「する」であったが、夫は1例が「しない」、2例が「させられると思う」であった。

2. 非同伴群の同伴分娩に対する意識

非同伴群61例の次回同伴の希望の有無については、「する」が9例（15%）、「しない」が27例（44.3%）、「わからない」が23例（37.7%）、「させられると思う」が1例（1.6%）、無回答1例であった。しかし、妻の同伴の希望は27例（44.3%）とかなりの高率であった。

3. 育児への夫の参加

夫が参加できる育児行動のなかで自己評価しやすい「抱っこ」、「おむつ交換」、「沐浴」について検討した。

「抱っこ」については「よくする」が同伴群で

\*1 新宅産婦人科病院 やまがた たけひ, 他

\*2 同 助産婦 \*3 同 婦長 [〒700 岡山市平和町7-22] \*4 高知医科大学産婦人科

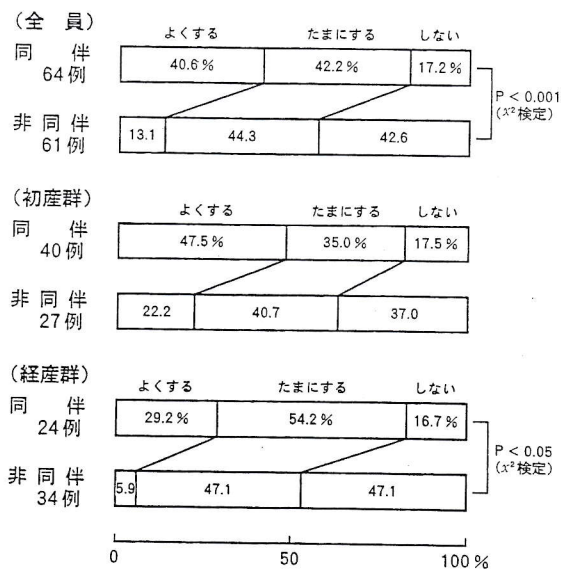


図 2 夫の育児への参加 1. おむつ交換

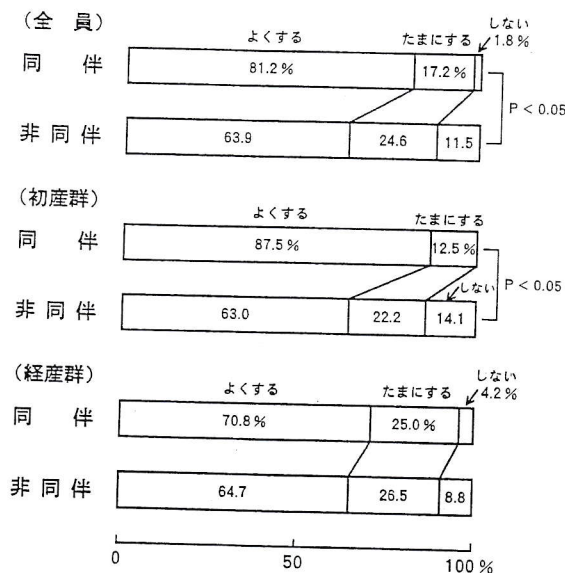


図 3 夫の育児への参加 2. 沐浴

54例 (84.4%), 非同伴群で47例 (77.0%), “たまにする”が同伴群で10例 (15.6%), 非同伴群で13例 (21.3%), “しない”が非同伴群で1例 (1.6%)となり, 同伴群と非同伴群との間で有意の差がみられなかった。

“おむつ交換”については図2に示したように同伴の有無により明らかな違いがみられた。同伴群で“よくする”のが40.6%であったのに対して、非同伴群では13.1%にすぎなかった。また、“しない”と答えた例が同伴群では17.2%であったのに対し、非同伴群では42.6%と高率を示した。この傾向は経産群で著明であった。

“沐浴”については図3に示した。“よくする”のが同伴群で81.2%, 非同伴群で63.9%, “しない”が同伴群で1.8%であったのに対し、非同伴群では11.5%となり, おむつ交換と同様に, 統計学的に有意な差がみられた。この傾向は初産群で著明であった。

#### 4. 性生活への影響

性生活の開始時期については2カ月未満が, 同伴群45.3%, 非同伴群41.0%, 2カ月以降3カ月未満が同伴群20.3%, 非同伴群34.4%, 3カ月以降が同伴群34.4%, 非同伴群24.6%となっており, 両群間に有意差はなかった。

性生活に対する支障については, 夫と妻おのこの反応を図4, 5に示した。支障があると答えた率は, 妻の側では同伴群14.1%, 非同伴群23.0%と非同伴群にやや多く, この傾向は経産婦に強かった。夫の側では同伴群18.8%, 非同伴群16.4%と同程度にみられた。いずれにしても同伴群と非同伴群との間には図に示すように有意の差はみられなかった。

### III. 考 察

現代社会において, 親子の絆を確立し得る成熟した母性や父性が次第に希薄になってきていることは, 日常の産科および小児科医療の現場でよく感じられることである。母性の確立に関しては山内<sup>1)</sup>の母乳に関する一連の研究などにより, 母乳哺育こそが根元的な母性および母子相互作用<sup>2)</sup>の形成を促すことが明らかにされ, 胎児期および新生児期の他の育児行動と合わせて, 周産期医療の指標となっている。しかし, 父性の確立にはそれを阻害する因子として社会構造上のいくつかの問題がある。

1) 少産時代がますます進行してきた結果, 兄弟の世話をする体験を持ってない<sup>3)</sup>。2) ほとんどが勤務者生活であるところから, 家庭において父親

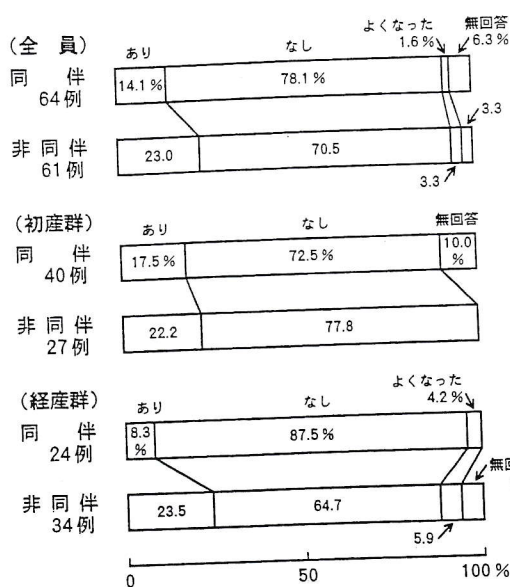


図4 性生活への支障(妻) ( $\chi^2$  検定有意差なし)

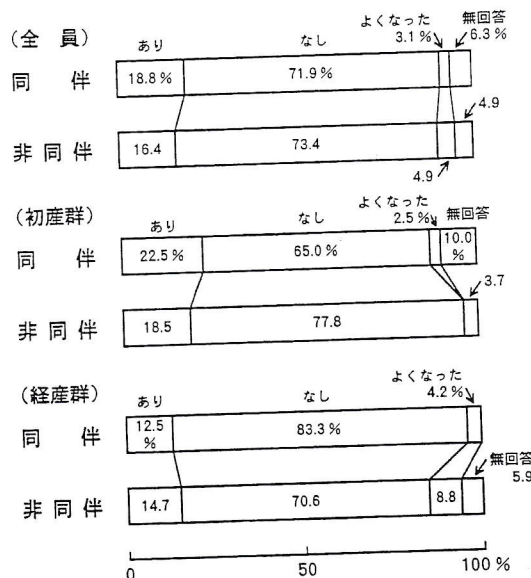


図5 性生活への支障(夫) ( $\chi^2$  検定有意差なし)

の働いている姿をみるのが少ない。3) 子供の集団での遊びが減少して、遊びの中で培われてきた指導力が訓練されない。4) 核家族社会の定着により、妊娠出産に対する夫の役割の認識が不十分である<sup>4)</sup>。これらのことから父親とはどのような存在であり、どのような役割を持つのかを認識する機会を持たないまま父親になってしまうのが現状ではなかろうか。

基本的には母親の育児行動が妊娠、出産、授乳とすべて自分の身体と関わっているため母と子の絆は自然に強められる素地があるのに対し、父親にはそれがなく、父と子の絆は家族としての結びつきのなかから形成されて行くと考えられる。しかし、ひと昔前の家庭内分娩で得られたと思われる出産に伴う不安と父となった感動が、施設分娩では得がたく、また、出産後は母子とも妻の実家に帰る慣習のため子どもに接する機会が遅れることもあり、現代の医療状況のなかでは父親にわが子であるという認識が形成されにくいことが推察される。これらのことから父親の育児への参加を意図的に計ることが、ふれあいのなかで父と子の絆を作るという意味でも重要になる。しかし、対馬ら<sup>5)</sup>の父性意識に関する調査にもみられるように、実際には父親の半数以上が育児への協力を

「まったくしない」のが現状である。

当院では育児を考える産科を目指し、母親学級、母乳外来、母児同室、育児相談、親子サークルなど、積極的に母性形成の援助を試みてきた。父性形成には父親学級で対応したが参加者は少なく、効果は疑問であった。一方、流行とも思われる同伴分娩に対するニーズが次第に高まり、デメリットを十分説明した上で試験的に開始したところ、夫の感激が大変強く、父性形成により影響を与えることが示唆された。それ以来、周産期医療の現場から手が届きにくい父性確立への援助のため同伴分娩を奨めるようになった。その結果、昭和60年より63年までの同伴分娩率は1.2, 6.0, 9.9, 13.8% (分娩数: 年平均693例) と増加を続けている。いうまでもなく同伴分娩への最初の希望は妻からが圧倒的に多い(78.1%)が、父親学級や、医師との面接を受けるに従って夫の気持ちの高まりが形成されて行くようである。その高まりが分娩を感動的なものとしてとらえ、図2, 3に示したような育児への参加を非同伴に比較し有意に多くしていることが示唆される。

当院で同伴分娩を始めた初期の頃の追跡調査で、同伴後はsexのたびに分娩時の状況が目に見え、かつ夫婦間に問題が起こったケースに遭遇し、解

決はしたがその治療に苦慮した経験がある。このように同伴分娩にはデメリットもある。その要因として、夫婦いずれの側にも相手に対する羞恥心と施設のスタッフへの羞恥心があること、また児頭娩出時、軟産道軟化開大の仕組みを納得して受け入れることが困難なため、そのダイナミックさにショックを受けてしまうことなどがある。これらを十分に説明し、夫婦間でよく話し合った上で同伴の申し込みを受け入れるわけであるが、その結果は図4、5に示すようにsexに関しては妻および夫のいずれの側にも非同伴群との間に有意の差はみられなかった。つまり十分な説明のもとに同伴分娩を行えばデメリットを最小限にとどめることができるものと思われる。なお現在のところ、同伴の夫が医療側にとって分娩介助の障害になったことは1例も経験していない。

#### おわりに

同伴分娩のメリットは産婦の安心感、父と子の

絆、夫婦の絆の3要素から考えられ、核家族化が定着している現代社会の中でよりよい家族関係を作る一助となると思われるが、そのデメリットもまた無視できないものである。したがって施設側が同伴分娩について十分に研究した上で明解な態度を妊婦および家族に説明すべきであろう。

#### 文 献

- 1) 山内逸郎：ヒトが“ひと”になるために。助産婦雑誌 39：930, 1985
- 2) M. H. Klaus, 他 (竹内徹・柏木哲夫訳)：母と子のきずな。医学書院, 東京, 1979
- 3) 高橋種昭：小産時代の育児。周産期医学 12：1529, 1982
- 4) 小此木啓吾, 他：周産期の臨床と父親の役割。周産期医学 18：115, 1988
- 5) 対馬範子, 他：父性意識に関する調査。母性衛生 27：262, 1986

\* \* \*